



## 男ごころに 男が惚れて 意気がとけ合う 赤城山

澄んだ夜空の まんまる月に 浮世横笛 誰が吹く (名月赤城山)

「男心」とは？ 勇気でしょうか。心に惚れ、意気に感じて、ボスの下に群れるということは、一般的に、男の行動パターンのような感じがします。

一方、女は群れず、相対する関係に生きるような感じがします。この歌は侠客、博徒の国定忠治を題材にした、親分子分の人情の機微を歌っているようです。東海林太郎が直立不動で歌うのを聞いたことがありまし

たが、夫の持ち歌(?)です。国定忠治(1810-1851)は、群馬県人が最も好きな県出身の人物だと聞きました。なぜ人気があるかと問えば、もちろん「強きを挫き、弱きを助ける」という豪胆、慈愛の権化だからでしょう。この忠治を「CHUJI」と題して、「ザ・チョンマゲ群団」制作による時代劇を築地本願寺のブディストホールで上演するという案内を頂き、参上つかまつりました。びっくりポン！ポン！ポン！

このチャンバラの筋書きは荒唐無稽とも、夢とも思えるファンタジーでした。「関所破りで磔になった忠治が実は生きている…」ということにして代役を仕立て、食うや食わずの百姓からさらにむしり取る金権、強欲な代官一派を懲らしめ、米を得る」というものです。その筋書を考えたのは、一の子分の日光の円蔵でした。子分たちはコソコソと隠れるように、また、自墮落に生きていたのです。たまたま、幕府から追われていた、腹を空かせた水戸藩士の天狗党の若者を一目見て驚く。親分に生き写し。「夢よ、もう一度」と彼に忠治になってと、頼み込んだのです。子分たちは皆円蔵の言葉を信じて、暴れまわります。代役に仕立てられた若者も、戸惑いつつも、庶民の苦しみを知り、権力に向き合おうとして、命を懸けるようになるのです。



忠治に助けられたという梅若一座の座長役になって歌と踊りを披露するのが、教え子の元タカラジェンヌ・北嶋マミちゃん。チャンバラの立ち回り、ヤクザが仁義を切つて、喜んで、タップダンス。登場人物たちが、舞台だけでなく、ホール全体を巻き込んで熱く演じてくれました。でも、ほとんど全員が殺されて、死んでしまいました。

私はふと、イエス様の復活を思い出しました。磔刑で死んだキリストが生き返ったと聖書は証言しています。逃げ隠れ、絶望していた弟子たちも、イエス様の命を懸けた姿、言葉を思い起こし、自分自身の中に力に漲って、生き返ったようになって、闘いを始めました。これが新しい歴史を作り出してきています。聖書の時代背景はローマによる圧制と同胞内の格差、差別構造でした。忠治の時代背景は外国からの圧力を受ける明治維新前夜の尊王攘夷論と大飢饉による貧困という、生きるか死ぬかという、似ている状況でした。41歳という短い人生だった忠治も、遺体が盗まれたという伝説があるといひます。聖書のイエス様の復活の物語を作者は忠治物語に投影して、仕立てあげたのではないのでしょうか。そして、「夢芝居」が出来上がりました。

聖書では、生き返るのは姿、形ではなく、「言葉」です。この言葉の中に命と力が溢れていて、死んでいたような人々を再び立たせてくれるのです。今回、大衆演劇として親しまれている国定忠治の物語を私は笑いながらも、ちょっと神妙になって、楽しんだのです。